要旨

バングラデシュでは、1972年からダッカ大学を中心に日本語教育が行なわれている。多くの日本語学習者は日本留学や日本企業への就職を目指して日本語を学んでいる。しかし、バングラデシュの多くの教育機関では、教育目標や教育方針が明確に示されておらず、また、授業内容と授業方法が学習者の学習動機と合致していないため、学習の継続率が非常に低くなっている。その改善には、授業内容を学習者の目的・動機に合うように変えていく必要がある。そのため、日本に暮らすバングラデシュ人が自分のアイデンティティや価値観、生活のスタイルを維持しつつも周囲の日本人との協力関係を構築し、問題を解決しながら生きていくために、どのような能力や技能が必要なのか、それを学習者に示すことが有効であろうと思われる。

以上の問題意識から、本研究は、バングラデシュのダッカ大学の日本語教育の内容と方法の改善に向けて、在日バングラデシュ人の日常生活における日本語使用実態を明らかにすることを目的とする。そして、教育現場・機関にむけて、教育内容と教育方法について具体的な改善案を提示するとともに、本研究で用いた調査研究方法を、海外に暮らすバングラデシュ人の言語使用実態や生活実態に関する情報収集に資する調査モデルとして提言することを目指す。

本研究では、具体的に次の3つの研究課題を設定した。

1. 在日バングラデシュ人は日常生活の中で直面している問題にどのように対応をしているか。【研究1】
2. 在日バングラデシュ人は豊かな生活を目指してどのように社会的関係を構築しているか。【研究2】
3. 在日バングラデシュ人は、日常生活のどのような場面で日本語使用を必要だと感じているか。【研究3】

また、上掲の3つの研究課題を考察・議論する理論的枠組みとして、本研究は言語生態学（岡崎：2009他）を採用した。本研究のデータ分析に当たっては、「孤立実体観」および「生態学的能力観」、「自己保存」、「異なりの対立」「異なりの内在的統合」「生態学的リテラシー」の概念を用い、在日バングラデシュ人が実際に周囲の人との接触場面でどのようなやり取り、あるいは、関わり合いをしているのかを考察した。

【研究1】では、在日バングラデシュ人が日常生活の中で直面した問題をどのように捉え、その解決に向けてどのような対応をしたか、さらには問題解決のプロセスの中で彼らの考え方や価値観がどのように変わっていったかを、日本語学校の学生2名に対するインタビュー調査によって探った。インタビューデー

タは、大谷（2008）のSCAT（4 ステップコーディングによる質的データ分析手法：Steps for Coding and Theorization）を用いて分析した。【研究1】では、アルバイト先での人間関係や就業時間に対する考え方についての異なりと、職場の賄い料理とムスリムの食材制限についての異なりについての語りから、当事者の価値観や考え方の保持（「自己保存」）の先鋭化が両者の「異なりの対立」に発展し、その「異なり」がどのように解決（内在化）あるいは決裂（外在化）するかを記述した。そして、問題解決の過程には、日本語能力だけではなく、当事者間の相互理解と意見調整、すなわち、自分の位置を把握し、周囲のコト、モノ、人との関わりを正確に捉える力である生態学的リテラシーが重要であることを示した。

【研究2】では、【研究1】と同様にインタビュー調査を行い、在日バングラデシュ人が豊かな生活を目指してどのように社会的関係を構築しているのか、彼らの語りを言語生態学の枠組みの中で質的に分析・考察した。日本に7～8年暮らしている社会人2人の語りから、日本での生活をよりよいものにするために、自ら周囲のコト、モノ、人にどのように働きかけ、どのように生活の場を拡げているのかを分析した。その結果、1人の社会人はさまざまなイベントやボランティア活動に参加することによって、精神的に誇りを持つことができるようになった。また、もう1人の社会人は職場で断食というイスラム教の習慣を説明し、周りの人に理解を得ることによって、自文化へのプライドを持って働けるようになった。この2人の社会人は、周りの人との協働作業を通して、自分自身の社会参加の場を拡げ、社会に対する関わりを豊かにすることができており、【研究1】同様、生態学的リテラシーが重要であることが示唆された。

【研究1】および【研究2】は、それぞれ2人ずつと、限られた調査協力者のデータ分析の結果であり、これをもって在日バングラデシュ人の全体的傾向ということはできない。そこで、【研究3】では、広く在日バングラデシュ人の日本語使用の状況を調べた。在日バングラデシュ人169人を対象に、どのような場面で日本語使用が必要だと感じているかをについて、日常生活に関する42項目の質問紙調査を実施した。その結果、「仕事」「地域コミュニティとの関わり合い」「医療サービスを受けるための行動」「居住地域における生活者としての行動」「店内の購買行動」「交通情報の確認」「メディアからの情報収集」という7つ因子が抽出された。その7つの因子に含まれる言語行動に共通する特徴を検討し、在日バングラデシュ人が日本語使用の必要を感じる場面は、大きく、①サバイバル場面、②臨機応変な問題解決場面、③外の世界への社会参加場面の3つに分けられた。そして、②の臨機応変な問題解決場面と③外の世界への社会参加場面では、【研究1】と【研究2】で指摘した生態学的リテラシーの重要性が確認された。

上掲の3つの研究の結果を踏まえ、総合考察では、バングラデシュにおける日本語教育の改善を目指して、教育現場と政府への3つの提言を行なった。1つ目は、生態学的リテラシー育成のために、3～4年生の授業にケース学習を取り入れ、教授方法を改善すること、2つ目は、【研究3】で示したサバイバル場面において求められる日本語能力をCan-doで記述することで、1～2年生の授業の学習目標とシラバス改善を図ることである。さらに、バングラデシュの外国語教育全般に通じる政策的な視点から、3つ目の提言として、海外に暮らすバングラデシュ人を対象にした外国語使用実態調査の必要性を述べ、調査モデルを提示した。

本研究の意義として以下の4点が挙げられる。1点目は、在日バングラデシュ人の日常生活における日本語使用と生活実態を調査する中で、問題解決場面や社会参加場面で生態学的リテラシーを持つことがいかに重要であるかを示したこと、2点目は、これまで言語生態学の理論的枠組みを用いた研究は、主に受け入れ側からの視点で行われてきたものが多かったが、本研究は、参入側の視点から、周囲のコト、モノ、人との関わり合いのあり様を言語生態学の理論的枠組みの中で分析・考察したこと、3点目は、バングラデシュの日本語教育に、生態学的リテラシーの育成を目指したケース活動を取り入れる必要性を示したこと、そして、4点目は、バングラデシュの海外への労働力提供に関連して、海外在住バングラデシュ人の外国語使用実態と生活実態を調査・研究するモデルを提示したことである。

今後の課題としては、ケース活動の授業に用いるためのケース教材作成の作業を進めること、そして、【研究3】で明らかにしたサバイバル場面の言語行動をJFスタンダードのCan-doと照合し、具体的な学習目標と達成度が明らかにできるような環境を作ることを考える必要がある。そして、教育省、あるいは海外在住福祉就職省等にどのように調査モデルの有効性を説明できるかを考えることも今後の課題とする。

キーワード：バングラデシュにおける日本語教育、在日バングラデシュ人の日本語使用実態、言語生態学、生態学的リテラシー